

婦人の研究

第八五回例会（一九七七・一二・一七）

家庭欄をつくる立場から

——「女と墓」わたしがこだわりはじめた理由
について——

南部 ひろ

新聞社に勤めてそろそろ十七年になります。そのほとんどを、わたしは婦人の家庭面の記者として過してまいりました。

学芸部に籍を置いて最初に与えられたのは、「女の気持ち」欄の投稿の整理でした。家庭面に、毎日、掲載されている主婦たちの投稿欄で、朝、出勤いたしますと机の上に、三、四十通にのぼる投稿の束が置いてありました。物価高への怒り、子供のしつけや教育をめぐる悩み、嫁、しゅうとめとのあつれきなど、大学を出たばかりのお嬢さん記者のわたしには、はじめて触れる「女の暮し」でした。

台所の隅で、しゅうとめにかくれるようにして筆を走らせたのか、原稿用紙に煮汁の飛んだあとや、白髪が一本、落ちていた投稿もありました。掲載されるのは一日、一本で、そのほかは、くずかご行

第 45 号

1978 4 17

* 家庭欄をつくる立場から

南部 ひろ

* カナダの婦人たち

坂東 昌子

きでしたが、わたしには、投稿のひとつひとつが、母のつぶやきのように聞こえ、とても捨てることができず、デスクの目を盗んでは、机のひき出しの中に、しまい込んでいたものです。

さて、きょうのテーマ「女と墓」は、実を申しますと、まだ全くといっていいほど、つつこんだ勉強をしております。二、三カ月前でしたか、寿岳章子先生にお会いした時、たくさんのお主婦たちと接している新聞記者の体験と、わたし自身の個人的な体験とをとおして、婦人問題は、女がどこの墓に入るかという、女と墓とのつながりを抜きにして考えることはできないのではないかと、感じたままをお話したところ、ぜひ、この会で発表を、と誘っていただいたのですが、そのあと、なにひとつ勉強らしい勉強もせず、出てまいったわけで、申し訳れなく思っております。そこで、きょうは、なぜ、わたしが「女と墓」の問題に興味を持つようになったのか、そこらへんを中心に、お話をさせていただくことで、お許し願いたく思います。

婦人・家庭面の読者は、大半が家庭婦人で、料理、洋裁、しつけ、育児、手作りなどの実用記事が最もよく読まれています。ところが婦人雑誌をはじめとする情報の発達や、カラー・テレビの実用番組の進出で、ここ数年、家庭面の実用記事のあり方が、問い直されて

きました。

これまでにない新しい実用記事を書いて欲しい、と、部長から依頼されたのは、二年前の夏ごろだったと記憶しています。いろいろとチエをしぼってスタートさせたのが、女性の生活史と、その中でつちかわれてきたであろう女の思いとを、記者であるわたし自身が想像をめぐらせてまとめる、いわば随筆ふう実用記事でした。「着る」

「食べる」「洗う」という暮しに密着したテーマを四回にわけて連載しましたが「着る」では、きものを取りあげ、わたし、という戦後世代の女が、自分の手で果してきものを着つけることができるか、ゆかたを縫うことができるか、に挑戦。「食べる」は、わたしのおしゅうとめさんの年代にあたる料理の専門家について、おふくろの味を作ってみましたし、「洗う」は、かつて日本の洗剤だった、さいかちや、むくろじ、灰汁を使い、タライで洗たくもしてみました。わたしの母や、しゅうとめの世代がやってきた家事を、紙上で掲載したので、たくさんの発見の中で、最も強烈だったのは、そうした日々の仕事をおして形成された日本の女の「怨念」でした。

わたしは、老人問題にも関心を持っています。七年近く寝た切りのおおじゅうとめと、白内障でほとんど盲目になってしまったしゅうとめを抱え、社会福祉制度の立ち遅れた日本の嫁のおそろいさを体験したのが、きっかけです。恍惚病棟で会う老女たちは、まるでわたし自身の将来を見るようで、さらにおそろいものでしたが、その老女たちは、恐らく、しゅうとめに仕え、叱られ叱られながら家族たちのきものを縫い、薄暗い土間でおふくろの味を煮炊きし、しもやけで赤くふくらんだ手をたらいの水につける女の一生を送ってきたに違いありません。いまだんな思いで、ベッドにつき、どん

な思いで嫁いだ家の墓に入っていくのでしようか——、「女と墓」の問題が、わたしをとらえたのは、この時でした。

昨年の参院選の折、わたしは「女性党」を追いかけました。榎美沙子さんはもちろん「女性党」から立候補した女の人たちにもいく人かインタビューしましたが、そのうちのお一人が、もらした言葉、どんなことがあっても婚家先の墓には入りたくない、実家の兄や兄嫁がなんといおうと、自分の生まれたるうちの墓に入る、嫁にも、どこの墓に入るかを選択する自由があるはずだ、という言葉に胸をつかれ、女の怨念の深さを見るような気がしました。

わたしは来年、三十代とお別れします。そろそろ「不惑の年」になるというのに、あきらめが悪いのか、正直いって婚家先の墓には……という気持が痛いほどわかります。そうした言葉を吐かずにはいられない嫁として妻としての不幸——わたしは、それ以後、主婦たちの集いに出かけるたびに、さらりと聞いてみました。思いのほか、そうおっしゃる方の多いのに、驚かされました。中には、夫にむかって口に出し、なぐり倒されたという主婦もありました。日本の嫁が、婚家の先祖代々の墓に眠るようになったのは、いつのころなのか、わたしははつきりとは知りません。でも、どんな思いで、その湿った墓に入っていたのか——全ての怨念からふっ切れ、たいらな気持であったのか、いやだ、いやだとあがきつつ、血をわけた子供たちのためにという気持であったのか、このどんな思いでというところに、わたしは、いまこたわり続けているのです。

欧米ではどうなのでしょう、解放後の中国、また台湾ではどうなっているのでしょうか。「嵐ヶ丘」や「怒りの葡萄」の埋葬の場面が、わたしの頭に浮かんできます。「女と墓」はわたしにとっては、ま

だ、ほんの入口の段階で、ご期待に添えるような報告はなにひとつできませんでしたが、婦人の問題にかかわっている新聞記者のわたしは、ここを避けては通れない、という思いだけは押えても押えても、ふくらんでいくのです。しもにつけるものを風呂敷にくるんで「ぽっくり往生」の祈願に出かける、老女の群れ、しゅうとめのしもの世話を終えほっとしたのも束の間、こんどは嫁にしもめんどろをみてもらえないのでは、という不安におののく老女の群れ……わたしの目から、離れません。「墓」から、わたしは女を見つめていきたいと思っています。

討 論

南部ひろ子さん。毎日新聞の家庭欄を担当して十七年。次々と新しい企画を生み出してゆくベテラン記者。華やかな若々しい雰囲気を持つひと。その人の口から、婚家のお墓の中にお骨を納められるのは絶対いや！ という言葉が飛び出したときは、あまりの思いがけなさにビックリ。「夫のお骨とは一緒にいたいけれど、死んだ後まで、夫の家族と一緒にいるのが嫌なのです」とおっしゃる。若い人の中にも、このような考えを持つものが随分多いのです、ということと二度ビックリ。

じつは私のごく身近にも、同じようなことを考え、それを自分なりに解決したひとがいる。それは今年七十一才の私の母。「自分が死んだ後、ワザワザ南九州の果までお墓参りにきてもらうのは、子孫に気の毒である。だから近くにお墓をつくりたい」というのが、母の言い分であった。しかし本音は、姑と一緒にのお墓に入るのが嫌

だったのだ。そして数年前に、自分達夫婦が入り初めになるであろうお墓を建て、しまった。こんなことを考え出すなんて、自己中心的傾向の強いひとのわがま、だ、と私は思っていた。ところが、母よりも一世代も二世代も若い妻たちが同じようなことを考えているとは。妻にとって、夫の家族とは何なのかを改めて考えねばならない時代になっているらしい。

というわけかどうかわからないが、南部さんからは他にも種々の話題が提供されたにもかゝらず、討論の時間は、もっぱらこのことに終始してしまった。けれども、この問題の解決法が見出されたわけではない。それはこの問題が、日本の女に共通する悩みとまではなっていない点にあるようだ。肉親と同じ墓地に埋葬されることになっっている独身のひと。死後のことは子供たちに任せて、安心して家墓に入るつもりの一ひと。そんなことは考えてもいないひと。この時の出席者から、「私も同じこと考え、悩んでいるのです」という言葉はついに聞かれなかった。

南部さん自からおっしゃっているように、こんなに個人の意識が強いのは、長年のキリスト教的教育の影響なのだろうか。そういえば、私の母は、「婦人の友」の長年の愛読者である。

話は古代中国の葬い方のこと、現代中国の共同墓地化のこと、アフガニスタンの共同墓地のこと、インドの葬い方のこと、朝鮮の墓のこと、スエーデンの公園墓地のこと、などなど。お国柄と宗派によつて、葬い方の様式が異なり、死者への考え方が異なることを知った。しかし、日本のその何と複雑な様相を帯びていることか。仏教、神道、キリスト教などの宗派の異なりに、地域における葬い方の習俗の異なりが加わって、多様なお墓のあり様をつくり出して

いるのだという。さらにこの上に、歴史的変遷を加えると、どんなに複雑なことになるやら、と。「南部さん、これはあなたの一生のお仕事になるわねえ」と寿岳先生。

「女とお墓」の前の話題は、老人福祉施設にみられる悲惨な老人の状態について。それは家族から見離された老人達のウバ捨て山であるらしい。「恍惚の人」に描かれていた痴呆性老人たちが（その殆んどはオバアサンだというが）ギツシリとつめこまれている病棟の現実。南部さんはそれを、「女としての自分の未来の姿を視てしまった恐しさ」と表現される。それも確かに一つの現実ではあるけれど、しかしそれが、すべての女の終極の姿だとは、私には思えない。何故なら、私が今まで身近かに接する機会があつたおばあさま方は、身ぎれいで、キリキリシャンとして、美しくさえあるからだ。私が恍惚の人に関心を持つとすれば、そんなオバアサンたちも、二、三十年前にはもっとマシンな中年婦人だったろうに、それがどうして現在の老醜をさらすようになったのだろうか、という点にある。私が身近にみている美しい老人達との差が、どこで、どういう具合に広がってしまったのかを知りたいと思う。

もつとも女性の老醜のひどさについては、二、三世紀頃の仏教論書にもしるされている。曰く、「菩薩は欲の種々の不浄を観るに、諸衰の中に於て女衰は最も重し」と。この世の中の愛欲の対象となるものゝうちで、最も美しく、そして最も移ろい易いものは女性の美しさであるという。美しければ美しいだけ、恥らいを持っていれば持っているだけ、それを失った時の老衰の醜さが、一層きわだつて感じられるのであろうか。生物的生命が長びくということは、何と残酷なことだろう。

つぎに「洗う」ことについて。昔の洗剤の話が広がって、何時頃かから、どうして、洗濯は女の仕事になったのだろうか、という問いが出された。洗濯女、洗濯婆さんと呼ばれるように、洗濯仕事は、洋の東西を問わず、女の領域だったのだろうか。インドでは、家事の中で、食事作りは高級な仕事で、掃除・洗濯は低級な仕事とされている。料理は、洗練された味覚や視覚、創造性が要求されるが、洗濯は機械的な手の働きしか必要とされないからであろうか。浄土経典にいう。アミダ仏の浄土には「衣服の洗濯や、裁縫や染色の仕事」の苦労はないと。これは、女性の姿は浄土にない、ということ、関連があるのだろうか。

いつもそうであるように、今回も時間切れで、十分に論議されることなく、終ってしまった。とくに、「洗う」と、「老人福祉」の問題については、独立のテーマとして取り上げる予定らしいので、後日をご期待下さい。

（参加者十三名 永田記）

カナダの婦人たち

坂東昌子

一、広大な土地、農林業が主で原料を輸出し製品を輸入する。全く日本と正反対の経済的構造をもつ国、カナダに一年間滞在した経験を新春の放談のつもりでお話します。短期間ですから誤解もあるでしょうがお許し下さい。

二、はじめにカナダの状況を簡単に紹介しよう。米大陸全体がそうであるが、欧州人が新開拓地を求めて移住し始めた時から歴史が始まるというてよい。特に北米は先住民（アメリカンインディアン、エスキモー人）はアングロ系欧州人に征服され、かろうじて現在伝統美術品等として保存される他は、移入された欧州文明にとってかわられた。これに反し印象深いのは、ラテン系欧州人の南米大陸進出によって滅ぼされたとは云え（実際そのやり方は北米以上に残虐であったという）高度の文明を誇っていたインカの伝統は受継がれ欧州文明と融合し人種も混血していった。南米からきた人たちは、北米の「混合しない」ことを不思議がる。確かに北米特にカナダでは各種各様の民族が独自の伝統習慣を堅持している。自分たちの文化を保存するための努力を惜しまない。カナダには、ケベック州に移住したフレンチカナディアンと、独立戦争の際英国王に忠義心をもち米を逃げ出したオンタリオ州附近のイギリス人が二大勢力で今でも仏語・英語が公用国語である。更に人口が少い事から、移民を

奨励した為、欧州各国やアジア等から労働者、技術者等として、又革命時逃れた東欧人ロシア少数民族、軍事政権に追われたチリ・南米の人々、こういったあらゆる人種が雑居している。ちよつとした町には必らず新カナダ人の為の特別の学校があり、子供に国語を教える。（うちの十二才の娘も通った）。伝統・文化を異にする人達は、各々共同体を作り、独自の教会をもつ、その集合体がカナダを形成している。事実カナダは政策として多重構造の文化の維持発展を奨励している。均質の伝統・同一民族の中で生活していた私にとっては実に興味深い光景であった。こういう中でカナダの婦人の状況を述べるのはむずかしい。典型としてケベック・オンタリオの婦人たちについて多少考えてみたい。

三、カソリック教の影響の強いフレンチカナディアンは非常に保守的である。事実州として婦人参政権を認めた最後の州がケベックだという。しかもその中で婦人参政権の運動の中心となったのはモントリオールなどの英語系婦人であったという。彼女たちが何故保守的であったかという点、カソリック教の価値観と深くかわりあっている。婦人の役割は母であり妻であり、そして更に文化的伝統の守り手である。伝統の守り手という位置づけは日本の古い婦人観にはないが、これはカナダのように互いに異なつた伝統文化が競合している社会で「民族の独自性と誇り」を保つためには、それなりに大変なエネルギーがいることを反映しているのではなからうか。

（大なり小なりヨーロッパでも同様な状況がある事もうかがえる）
こういうきびしい情勢の中で誇り高い保守的な婦人たちが存在したというべきであらう。こういう光景を思いうかべていただきたい。
カナダでは冬の長い夜などよく何家族か招いて（夫婦のみ子供はゆ

かない) 食事や歓談の会を催すが、招かれた家の主婦を手伝うのは大てい日本を含めたアジア人の婦人で彼女たちはおしゃべりの仲間に誇り高くおさまってびくともしない。私たちの研究室の女子院生だったルーシーはそんなタイプの女性だった。彼女は交替研究員で滞在していたハンガリー人と婚約し、彼の国に行く事になった。その彼女が、自分の子どもが生まれたとき、男性の場合なら国外にいてもその子どもはカナダ人と認められるのに女性の場合ダメと知ってどんなに憤ったか想像できるだろうか。

四、合衆国により近く、組織労働者も比較的多いオンタリオ近辺では事情は異なる。私のいたハミルトンという町は、湖の近く、大きな鋼鉄工場があり、デトロイトやバッファロー等、近くに工業地帯が林立する。生活形態もアメリカ風であり、婦人たちは殆んど働く事を望んでいる。生活も簡素で、衣食住すべてについて合理的で時間をとらない。私など日本では気がつかなかったが、どれだけ生活を維持するのにエネルギーを使っていたか思い知らされた。その上教育は学校にまかせっきり、子どもたちは教科書ノートすべて学校で配布され学校へ置きっぱなし、手ぶらで学校へ出かけ宿題もない。勿論落ちこぼれもない。何故なら「わかった程度に応じて進級する」からである。うちの息子は三年生だったが、二年のクラスで英語をやり四年のクラスで算数をやった。(日本の子は一般に一年位、上のクラスで同程度である)。それでもABCも知らなかった息子は二、三ヶ月もたつとテキストをスラスラよめるように学校で教えてもらった。塾の話などしても、とても理解などしてもらえなかった。だから子供が小学校に通うようになると、働きに出たい人が急激に増加する。「何故働くか」などと云わない、お金を得る為

である。しかし不思議なことに公立保育所はなく、いわゆる共同保育所はよくみかけた。(大学の自治会経営のもあった)、育児期間には母親であり、その後又働きに出るといいういわゆる「アメリカ型婦人労働」が一般的であるからであろうか。高い保育料を払ってでも、まだ有利である婦人労働者のみが保育所を利用するのだと考えているようでもある。(しかし実際には、友人の情熱的でチャームिंगだったグランジスというパートタイムのスペイン語教官の女性は、お金のためだけに働いていたとはとても思えない。彼女も子育てには苦勞したようで、乳児の時はやはり母親にみてもらったということであった。)従って大多数の婦人はパートタイムや再雇用の低賃金を強いられている。特に週休二日制が徹底している為、土・日曜の仕事に従事する婦人がかなりいる。例えば大学で夜中の十一時近く研究室の清掃にまわっている婦人の姿もみかけた。わがマックマスター大学でも婦人の地位は低く私の行く少し前まで三年がかりで婦人の待遇改善運動があり大学当局に七項目の要求を提出して一定の成果を得たとのことであった。この要求中には、同一労働同一賃金、就職昇進の機会均等が主で、保育所要求は全然なかった。仕事は仕事、家庭事情は仕事には持ちこまないという論理が徹底しているのであろうか。大学で3ヶ月の夏休み、夏期講座で教えるグラジスが(夏休みは保育所は休み)子どものめんどうをみるのに、友人たちの助けをかりている姿が対照的であった。

「楽しく新春放談といきましょう」というわけで、坂東氏が一年間見聞きして来られたカナダという国について、あれこれ話しがはずんだ。

まずカナダで感心したのは、女性にしても小さな子供にしても一人一人が自信を持って堂々としている事だそうで、「本当にそうね。自分を信じてその通りに主張し生きてゆくというのは、まア西欧型と言えますね。実は私もそうだけど」の声あり。「お話しを伺うとカナダとイギリスは色々な点で似ていますね。ただ人種差別については少し違う様です」とは英国でくらしした方の意見。ただ報告にも再三出て来た様に、一ト口にカナダといっても北部と五大湖付近の南部の方とでは随分違いがある様で、「ケベック州などは中小企業が多いからどうしても保守的になり安いのでは？」という意見も出る。

お隣りのアメリカとカナダの違うところはカナダではまだ若い人がアメリカ程不健全になっていない点だそうで、これは日本にも言える様だが勿論だからといって安心は出さない。覚せい剤を使用していた中学生の事件や野洲の中学生殺傷事件、又暴走族など若い世代のゆがんだ一面が新聞をにぎわしているのは、周知の通りである。

又カナダの大学についても色々話しが出た。授業料は国立でも随分高く、私立もあまり変わらないとの事。大学への進学率は男女間であまり差はないが、大学院となるとやはり女子は少い。日本の様な進学ブームはみられず、大学進学率はカナダの方が低い。ただむ

こうは夏季講習、夜間講座等一般市民に対しても、気軽に参加出来る機会が多く設けられており仲々の盛況との事で、日本の様に学校を出てしまってもうノートや鉛筆と縁がなくなってしまう習慣を、大いに反省させられる。

又「日本の女性は例えばスチュワーデス、デパートの店員等何故あんなに愛想がいいのか？カナダではどうか？」という意見が出て、俄然皆のオクターブが上り「それは日本に於ける女性の位置づけが、歴史的、社会的に低くおさえられて来た為である」という事になる。カナダを含めて外国の女性の場合、経済的には差別されていても社会的、文化的な面では、一個の人格として非常に尊重されており、その点日本に於ける女らしさというのは、娼婦型といえるのではないかという声が強かった。

これ等に関して離婚の問題などが出て「離婚率は日本より高いですね」、「夜十時すぎの帰宅があまり続くと、離婚の条件になるそうヨ」、「とに角離婚するといしや料が莫大で男性は大変みたいね」、「母子家庭がとても大切にされているのは確かですね」、「いしや料が入らない場合は、生活に困らない様社会的に保障されていますね」といった調子で、いずれにしても日本は大部遅れているといえそうである。

このあと教育問題も話題になり「塾はないのか？」といった質問も出たが、「塾なんて聞いたこともない」、「外国の小学生というのは実に生き生きしてますね」、「カリキュラムにも問題があるみたい」などなど、とに角外国の場合は大学に入ってからが大変なのであって、それ迄は割合楽に学校生活をすごしているといえる様だ。日本の様に小さい頃からガチガチ勉強するといった背景には、「学

歴社会」というゆがんだ現状が存在するわけだが、ドイツはやや日本に似ていて学歴社会といえる様だが、カナダ、イギリスあたりではそういう事はないという報告があった。

その他、働いている婦人は育児をどうやっているのかという質問も出たが、これは坂東氏も機会ある毎に大学関係の職業婦人に聞いてみたそうだが、独身者が多かつたりでその実態はあまりよくつかめなかつたとの事である。

「ファッションはどうか？」という声には「とに角自由な国でてんでんバラバラ、皆それぞれに他人の目を気にしないで好きなものを着ている」そうで、日本の様に四季折々「やれ、衣更え」「それ虫干し」と整理に追われることもなく、概して衣生活は簡単な様である。

最後に老人問題が出たが、一言でいえばカナダは若い人の国であり、老人には仲々きびしい社会との事。大学等でも年を取って頭が多少ぼけて来ると容赦なくクビにされている様で、日本のように年功序列というわけには行かない。でも老人ホームは各地にあつて各国出身の篤志家が、お金を出して建てている場合が多いそうである。

今迄知らなかつたカナダの色々な面を報告して頂き、皆随分カナダという国が身近かになった様子。今後も折があれば各国のレポートを聞かせてもらうのも良いと思つたことだった。

了

(記、吉田 出席十七名)